

【ねがいましては】

令和6年6月3日

KYOWA SCHOOL

第410号

「たすけて」

読売新聞の編集手帳からです。英国の CHARLIE MACKESY (チャーリーマッケジー) さんの絵本、「ぼく モグラ キツネ 馬」飛鳥新社 から一部が引用されていました。

以下記事より抜粋 — 迷子の少年が雪降る森で巨大な馬に出会い、尋ねる。今まであなたが言った勇敢な言葉は？馬は「たすけて」と穏やかに答えた◆「たすけを求めることは、あきらめるのとはちがう。あきらめないために、そうするんだ」。 途方に暮れる背に、そっと手を添えるような声掛けだろう◆本紙滋賀版で、犯罪被害者支援センターが小学5年生のある少女の作文を冊子にしたという記事を読んだ。タイトルは『「たすけて」はまほうの言葉』という。少女は性被害に遭い、親や友人、先生に言えなかった◆のちに犯人が捕まった。被害を知ったお母さんから「なにかあったら『たすけて』と教えて。助けてあげるからね」と諭され、心を落ち着かせる大切な言葉になった。＜「たすけて」は、人をすくう言葉です。この作文を読んだ人を、きっと『たすけて』くれる＞。あきらめない魔法の言葉を広めようとする勇気に胸打たれる◆いたたまれなくなるような卑劣な犯罪が絶えない。少女の作文は各学校の授業に生かされるという。—

この絵本、実は所有しており、あわてて読み直ししてみたところです。「ことばの力」を再認識させられています。「たすけて」・・・「生きたい」「今から抜け出したい」・・・母のひとこと「助けてあげるからね」・・・。少女の心の中が安心感で満たされていくのが手に取るように見えてきます。

この子の「たすけて」は性被害という卑劣極まる犯罪によって奈落の底まで落とされてしまった自分から発せられた必死の言葉でした。それを引き出してくれたのが母からの一言です。「なにかあったら、『たすけて』と言って、お母さんに、SOS サインを出しておしえて、助けてあげるからね」です。この声掛けがなかったら、おそらくこの少女は言えないままだったのかもしれません。

子どもたちの日常の中で、『たすけて』の原因となるものは他にも多く存在すると思います。その一つに「テスト結果」であったり「順位」であったり、本当はお母さんに一番助けてもらいたいはずなのに、現実はい言えぬ・・・。

なぜなのか？ 子は察しています。たぶん「助けて」と言っても助けてもらえない・・・と。何が原因なのか。もうご両人ともにわかっているはずです。テストや順位で両者の間に感情的な出来事が過去にあったはずです。特に「一方的に、トップダウン的に」です。これでは『たすけて』は子のこころの中には生まれません。また、母から子へも「SOS サインをだしておしえて」と言えません。

学校での成績と性犯罪とではあまりにも差がありすぎるかもしれません。しかし、最も大切なのは子と親との間にある『信頼』です。いつでも頼ることのできる存在、いつでも話すことのできる存在として、永遠の存在として子の中に宿る『安心感』は子が成長するための日常必須のものであるはずです。

いつのまにか、距離ができてしまった親と子の「こころ」、今一度、足もとをご覧ください。さて、どうでしょうか。お子さんは「あんしん」されていますか。

この、「ぼく モグラ キツネ 馬」から、私が惹かれたところをいくつか紹介いたします。

- ・『「おおきくなったら なにになりたい？」モグラにきかれた。』『「やさしくになりたい」とぼくはこたえた。』
- ・モグラは自分が食べられてもおかしくないキツネがわなにかかっていたところを、自分の歯でわなの針金をかみ切つてあげます。少年→「きみはすごいよ」モグラ→「なにかがおきたときにどうふるまうか。それこそが、オイラたちにあたえられているさいこうの『じゅう』ってもんさ」
- ・少年とモグラは馬の背に乗って走ります。が、馬からふたりとも落ちてしまいます。そして少年はモグラに向かって「ごめんよ」とぼく。「きにするなよ」とモグラ。「ぼくが手をはなしたからおちちゃった」ぼくはいう。「こわかったよね。ごめんね、ごめん」・・・「ききなさい」馬がいった。「涙がでるのはきみが弱いからではなく、強いからだ」
- ・「いままでにあなたが言ったなかで、いちばんゆうかんなことばは？」ぼくはたずねた。「たすけて」と、馬はこたえた。「たすけを求めることは、あきらめるのとはちがう」馬はいった。「あきらめないために、そうするんだ」
- ・「オイラほんとは・・・みんなのことがだいすきだってつたえたいんだ」モグラがつぶやいた。「でもうまくいなくて」「そうなの？」ぼくはくびをかしげる。「だからみんなといっしょでうれしい、なーんてこといってもいいのかな」「もちろんさ」「みんなといっしょでうれしい」「ぼくたちもさ」
- ・「じぶんではどうにもならないと感じたときは・・・目の前にある大切なものをじっとみつめる」馬がいった。「やがて、嵐はすぎさる」
- ・「ぼくたちは、どうしてここにいておもう？」とぼく。「ケーキのためかな？」とモグラがいった。
「愛するためだよ・・・そして愛されるためさ」